

昨日までと異なり、その周辺には、与力が目明  
かしらしい者を従えて出張り、周囲に油断な  
く目を配っているのが、物陰から窺える。間口  
九尺ほどの自身番屋の戸口には、捕り物道具  
が十数本も立て掛けられていて、村役人が、  
傍らにいる松平家の家紋である三葉葵入りの  
羽織をまとった藩士に見せている。番屋の中  
は、何人かの人の動きが感じられる。

弥一郎は、すばやくその様を見て取ると、後  
ずさりして近くの松林に潜り込んだ。そして、

ない。思い切って砂糖を締めていた場所に近寄っ  
てみることにした。左右を田畑に挟まれた道を  
行く途中、提灯のか細い明かりが向こうに見  
え、数人の足音と轍の響きが聞こえてきた。  
急いで田に飛び下りて身を伏せた。まもなくする  
と、目の前に嚴重に荒縄をかけた荷車が近づい  
てきて、車輪の音を軋ませながら通り過ぎた。  
そのとき、前後を固めている男たちの中に、  
昼間見かけた高松藩士や与力の顔が、おぼろげ  
な月明かりに浮かび上がった。何か大事な物を

半ば朽ちている落ち葉や雑草を掻き集めた上に  
仰向けに寝転がり、刀を胸に抱くようにして目  
をつぶった。暗くなるまで待つつもりになっ  
る。

目覚めたときは、冬の透き通るような月光  
が、無数の枝葉を擦り抜けて顔を照らしてい  
た。弥一郎は寒さに震えながら立ち上がり、当  
て布のついた野袴や道中羽織の埃を払った。

もといたところに引き返してみると、あれほど  
いた警備の者たちの姿が、嘘のようにどこにも

運んでゆくのに違いない。男たちの囁くよう  
な声が、弥一郎の推測の間違っていないことを  
裏付けていた。

「……四十斤……献上……」

いままでに足しげく探索した情報に照らし合  
わせると、まさしく今宵、四十斤の量の白糖  
の製造を終え、高松藩主に献上されるために  
運び出されるのに違いない。一行をやり過ぎし  
たあと、弥一郎は彼らが来た道を逆にたどって  
いった。

釜屋の前の広場には、昨日までと同じく、大きな丸石が三つ縦に並び、真ん中の石の中央から突き出た杭に太い丸木が荒縄で幾重にも結わえ付けられている。だが、その端を引いて回っていた牛もいないし、砂糖黍の束を丸石の間につっこき突っ込んで絞っていた百姓の男女の姿も見えない。

弥一郎は、辺りを窺いながら身体を低くし、足音を忍ばせて近づいてみた。石の台座には、搾り取った黍の汁が流れるように溝が掘られ、

おのれしつせき 己を叱責するような声が、四十半ばの総髪を束ねた男の口から何度も漏れていたのが、いまでも弥一郎の耳に残っている。傍らにはもう一人、釜の中と炊き口とを見比べては、くべる薪の量を調整している顎の張った男の姿があった。周慶よりも若干若いのではないかと思われた。腰の坐り具合からして、かなりの剣の修行を積んだ者らしい。総髪の男が医師向山周慶で、もう一人が、薩摩の脱藩者、関良助であろうと推測された。

末端に木桶が置かれてあったが、それには、液汁がわずかにこびりついているだけだった。

さらに弥一郎は、十数間離れたところにある釜屋を覗いてみた。昨夜は、藁屋根をかぶせた小屋の開放した窓から、濛々と湯気が溢れ出ていた。中では絞った黍の生汁が、

五右衛門風呂のような二つの大釜で煮られ、幾度となく、煮沸と灰汁取りが繰り返されていたのだった。

「いいや。まだまだ駄目だ」

弥一郎は、今宵も当然同じような光景が繰り返されるだろうと、釜屋に近づく寸前まで思っていたのである。

ところが、釜から白い湯気は上がっていき、ゆうべまで血の滲んだ目をして、釜の中や炊き口を覗き込んでいた二人の男たちは、いまや放心したように地べたに坐り込んでいる。動いているのは、襦がけで釜の内側を洗っている、うなじの豊かな四十歳くらいの女だけだった。

「明日にしたらよいではないか」

向山周慶が放心から覚めたように、女に声をかけた。妻にかける口調が気だるさの中にも窺える。女はにっこり笑みを浮かべたが、手を休めようとはしない。額に汗が滲んでいるのも気にしていない様子である。関良助とおぼしき男が立ちあがり、私がやりましょう、と言いなながら女に近寄ろうとした。

「良助さんが一番疲れているのよ。私のことは心配しないで休んでいて」

がした。

おんな ふため かま あら はじ  
女が二つ目の釜を洗い始めている。関の目がそれを優しく見守っている。しばらくして関は、汚れ水の溜まった桶を手にして右側の戸口に近づいた。弥一郎は慌てて窓脇から離れた。梅の待つ牛小屋への野道をたどりながら弥一郎はつぶやいた。

「そうか、女だったのか……」

まもなく小屋が見えてきた。もう五ツ半

女が顔を上げて親しそうに応じた。月光が

屋内に射し込んでいて、窓の外から男の表情がよく見える。無骨そうな薩摩男の目は、愛し者を見つめるように女に注がれている。

男女間の燃えたぎる愛情などと言うにはあまりにも不遜な、それを遥かに超えた深い慈しみの情とでも呼べるようなものが、瞳に宿っているのが認められた。胸の内は測りかねたが、弥一郎には、いままで分からなかった謎が、わずかに疑問は残るものの、ようやく解けたような気が

(午後九時) をとうに回っているだろう。そう思った途端、腹の虫がぐうと鳴った。弥一郎の足が速くなった。

## 九

その日、八ツ半(午後三時)過ぎ、弥一郎は湊村を横切る街道をそれ、南へしばらく小道をたどったところにある山裾に張りついて、

樹木の陰から目を凝らしていた。十数間先の緩やかな斜面を上がったところが二百坪ほどの台地になっていて、その一画に十数基の墓が建っている。

遠藤や佐島たち薩摩藩士と別れてから、はや一月がたつ。梅の木の枝に蕾がつき始めている。寒さが緩むのを待ち詫びていたかのよう  
に、街道を行く旅人の数が増え始めた。西へ半里ほど離れた三本松の旅籠での泊まり客も多くなっている。

るのだが、「おいしい、おいしい」と言っ、目  
をくるくる回しながら口を動かしている女に  
も、あんな顔をするときがあるのか、と思いつ  
しても滑稽だった。出戻りで家族の者に疎んじ  
られているはずなのに、決してめげない、無邪気  
で屈託のない梅の笑顔が脳裏に浮かびそうにな  
るのを、弥一郎は頭を強く振って、払いのけ  
た。

視線の先には向山家の墓がある。昨夜、  
弥一郎は、三本松にある向山周慶の家の軒下

〈遠藤らは、今頃痺れを切らせているのでは  
なからうか〉

この分では、いつ湊村に顔を見せてもおかし  
くない。弥一郎の胸に、頼まれた仕事に對する  
焦りが生じ始めていた。

それを微妙に悟ったのか、百姓女の梅が、  
昨夜半過ぎ、牛小屋をあとにして寝所に戻ると  
き、なにやら神妙な顔をして弥一郎の寝顔を視  
き込んだのが、手燭の灯りで分かった。時折、  
人目を憚んで自分の飯を持ち込んで一緒に食べ

にたたずみ、周慶と関良助が話すのを盗み聞  
いた。今日の七ツ(午後四時)に、製糖の忙し  
さのために久しく遠ざかっていた墓参りをする  
らしい。

「私のほうが先に行っておきましょう。  
周慶どのと佐和さんは病人を診てからゆつく  
りおいでください」

関の言葉に弥一郎の胸が高鳴った。好機到来  
である。

「へもらった金子分だけの働きはしなければならぬまいく」

「そう思っている。昨夜は、周慶の妻女を見る関の眼差しが、あまりに清らかなのに心を打たれた。だが、あとで振り返ってみると、夜分のことでもあったし、目の錯覚ということも考えられる。やはり、関は他人の妻女に心奪われた。勘夫に過ぎないのでは、との念が刻の経過とともに強くなった。それならばそれで、与えられた仕事やり易い。捕縛できなければ斬り捨てて

とは承知していた。だが武士として、ひとたび受けた仕事は全うしなければならぬ、とも思っているのである。

「弥一郎は空を仰ぎ見た。約束していた刻限まで、まだ小半刻近くあるようだ。周慶の父政永の墓所は既に確かめてある。墓碑に向宗徒らしく、『南無阿弥陀仏』の文字が刻まれ、安永三年三月十三日覚阿了蔵居士とあった。生前は政所役に就任していたそうだ。墓が建てられてから七年余りの歳月は、かつては青白く精彩

も、さほど良心の呵責に捕らわれることもないだろう。弥一郎はそのように考えている。

「なにしろ、救ってくれた恩人の妻女に懸想して、自分の藩を裏切った男だからな」  
弥一郎の場合、人を斬るにはそれ相応の大義名分があるのである。そうでないと寝覚めが悪い。薩摩から持ち出した甘蔗の栽培を手がけ、昨年白糖作りに成功し、さらに改良を加えてその成功をゆるぎないものにしたいま、たとえ関を斬っても、制裁以外のなものでもないこ

を放っていたはずの庵治石を、潮風と土埃にさらしてか、幾分色落ちさせている。

そのとき、田畑の中の狭い道を、下男らしい老翁を伴って歩いてくる郷土風の男の姿が見えた。頑丈そうな顎の張りが目に大きく映ってきた。石くれの多い小道から伝わる震動を足腰が見事に吸い込んで、滑るようにやってくる。弥一郎は、その一挙一動を睨みつけるように見ている。

「思ったとおりだ。捕縛は無理だ。……が斬る

ことならざる

闘争心とうそうしんが奮ふる立ちた、心こころのつぶやきこえが声こえに出で

た。弥一郎やいちろうは慌あわてて唇くちびるを閉とじた。

(以上3月11日放送分)